

## 令和 3 年度「才徳兼備の人づくり小委員会」の進め方

### 1 基本的な考え方

令和 2 年度の「新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」」に関する提案の実現に向け、令和 3 年度の取組を検証し拡大を図るとともに、高等学校教育を取り巻く環境の変化や国における高等学校教育の在り方に関する議論等を踏まえ、「地域と連携した高等学校教育の在り方」について議論を深め、地域の特長等に応じた魅力ある高等学校づくりのための方策を提案する。

### 2 令和 3 年度の協議事項

地域と連携した高等学校教育の在り方

協議内容

< 具体的取組の改善と中長期的な方向性の検討 >

- ・ 令和 3 年度のモデル校での取組の検証を踏まえた改善事項及び中長期的な取組

< 加速する人口減少を見据えた魅力ある高等学校教育の在り方の検討 >

- ・ ICT 活用や少人数教育などによる教育の質の確保

### 3 提案内容の反映

- ・ 提案を踏まえた実践委員会の意見及び総合教育会議での協議を経て、次期教育振興基本計画（令和 4 年度～ 7 年度）や魅力ある学校づくりに反映

### 4 年間計画

実施時期	項目	内 容
第 1 回 (5 月頃)	論点整理	・ 検討の方向性及び論点の整理
第 2 回 (7 月頃)	論点深掘り	・ 第 1 回の会議を踏まえた論点の深掘り
学校視察 (9 月頃)	モデル校視察	・ モデル校における取組状況の把握
第 3 回 (10 月頃)	中間まとめ	・ 第 2 回までの会議を踏まえた論点の深掘り ・ 中間取りまとめ（提案骨子） 第 2 回実践委員会へ報告
第 4 回 (12 月頃)	取組状況検証 論点深掘り	・ モデル校の取組の検証 ・ 第 2 回までの会議、実践委員会及び総合教育会議の意見並びにモデル校の取組の検証を踏まえた論点の深掘り
第 5 回 (1 月頃)	最終まとめ	・ 第 4 回までの会議を踏まえた提案整理 ・ 最終取りまとめ（提案） 第 4 回実践委員会へ報告

## 「才徳兼備の人づくり小委員会最終報告」に関する実践委員会の意見

特別支援学校は、通常の高校より実習や体験活動等が多いが、最終的な出口で行き詰ることが多いので、モデル校に特別支援学校高等部を入れ、就職という出口に向けた取組を行ってほしい。

小委員会では、これまで高校は進学や就職など卒業後の進路に意識が向き過ぎており、深い学びができる地域との関わりがあまりなかったことを問題提起している。また、「受験勉強」と「地域との関わり」は二項対立ではなく、地域との関わりの中で教科学習に対する関心も高まり、教科学習で学んだことが現場に出た時に生きてくるという相互往還の中で高校での学びや問題意識が深まっていくイメージを小委員会は持っている。

将来にわたって自由に生きられる技を磨く、学ぶ場が高校、大学である。若手の研究者は生活に困窮しているという話を聞くが、やりたいことや夢を途中で諦めてしまうことにならない環境をつくってほしい。

地域と連携した活動を単位認定していくことはすごく大事であり、学校全体で地域連携に関心が向いていくきっかけになる。その結果、浜松学芸高校のようなすばらしい活動の事例が増えていく。仕組みづくりも大事だが、地域との関わりの中で何が課題でどうしたいのかを生徒の考えや自主性に任せる環境づくりができれば、ますます効果が上がる。

地域と学校をつなぐコーディネーターの存在は大きいですが、人口が集積する都市部と過疎化が進む郡部は一律でなく2つの視点がある。都市部では、外部の専門人材間で情報や好事例を共有して活動に結び付けてくれる人がいるが、郡部ではそれが難しく、人選が大事になる。人物次第であるため、人選をする、ミッションを共有する、ある程度標準化した行動指針を示すことが必要である。

人選については、県内に多くの支店を持つ金融機関と提携することで、集積された地域人材の情報を紹介してもらうことも考えられる。地域の経済が縮小すれば、学校の存在もなくなるので、地域を発展させていくことは非常に大事である。

「新しい時代」や「多様性」という言葉は聞こえは良いが、とても曖昧で都合の良い言葉として使われている。例えば、スポーツでも、プレイヤーの他にマネージャー、コーチ、トレーナーなど様々な関わり方があるが、プレイヤーに集中する傾向がある。また、言語学でも、英語、中国語の他にも様々な言語があるが、学校で学ぶ機会は少ない。「新しい時代」や「多様性」といった言葉の解像度をもっと上げてほしい。

地域が豊かでないと、豊かな教育はできない。静岡県は自然に恵まれており、その自然を十分に教育に生かすことが大事である。静岡県の山は竹林によって荒らされているが、大分県では高校生が伐採した竹を使って海の環境改善に取り組んだ事例がある。豊かな自然に感謝し、自然を守ることによって徳が生まれる。県内各地域で高校生が自然を守るために、頭でっかちではなく体を使うことが必要である。

学校が地域や企業と関わるためには、教員や保護者の意識改革が必要であり、企業の中にも魂が必要である。目指していることについての認識の一致がない限り、地域や企業との連携はなかなか進まないなので、そこを最初にしっかり行っていくことが必要である。

## 本年度の実践委員会と総合教育会議における主な意見

### 1 ICTを活用した教育の推進

子供たちの情報活用能力を育み、学力の向上を図るため、具体的にどのようなICTを活用した取組が考えられるか。

あわせて、それらの取組を進める上で、教員にどのような資質・能力が求められ、どのように伸ばしていけばよいと考えられるか。

また、ICTの活用と子供たちの心身の健全な育成を両立する上で、どのようなことが求められるか。

実践委員会（書面開催 6 月）

- ・ ICT 機器を上手に使いこなせる「才」の部分の磨くとともに、今後 ICT 社会が進展するほど、使う側の人間性を高める「徳」を身に付ける教育に力を入れていく必要がある。
- ・ 多くの子供たちは生活の中で経験的に身につけたメディアリテラシーのみで現実社会と対峙しているため、学校でのメディアリテラシー教育の充実を最優先に行うべきである。
- ・ ICT への依存度が高くなった人が「聞く力」を失いつつあるため、異なる価値観を持つ人との対話を避けるのではなく、ICT 機器を通して異なる価値観を持つ他者との双方向性を実現することがポイントになる。
- ・ オンライン交流やオンデマンド授業における問題点など、公立小中学校における課題を改めて整理し、企業や先進的な私立学校、大学等から学ぶ必要がある。
- ・ 環境整備を含めた方策を最優先に取り組むとともに、ICT 環境が整っていない家庭へ配慮しながら新しいことに取り組んでいかなければならない。
- ・ 県内には掛川西高校や聖光学院高校といった好事例があり、ICT 活用の環境整備と人材育成を一気に押し進める時宜にある。
- ・ 高等学校では PC を前提とし、機種を更新を考えると BYOD が、特別支援学校では状況によりタブレット又は PC の貸与が望ましい。
- ・ 学校や市町の境を越えて授業教材を共有し、分担して授業素材や教材を作成できるとよい。
- ・ 特別支援学校に通う生徒は、放課後等デイサービスで ICT を活用した学習支援の取組等を行うことにより、家庭や学校の負担が少なくなる可能性がある。
- ・ オンライン授業は、登校困難な生徒や、発表が苦手な生徒にとって効果的であるため、教室での集団教育を前提とせず、時間と場所に縛られない学校教育へ大転換するチャンスである。
- ・ ICT を学校教育でどのように活用していくのかについては、教員の能力が重要となる。
- ・ ICT によってより良い学びがもたらされる分野とそうでない分野があるので、全ての教科や分野をひとくくりで考えるのはよくない。特に芸術分野では ICT による授業は大変困難である。

総合教育会議（7月29日）

- (1) 人は人が育てるので、対面での教育が大事である。人間性を磨いていくためには、聞く力を高めることが大事であり、人間形成の第一歩である。
- (2) 日本のICT教育は遅れているので、新型コロナウイルスの影響を契機に5Gを導入して新しい教育を実現させる意気込みで、超法規的にスピード感を持って計画的に取り組む必要がある。
- (3) ICT教育は基礎学力を身に付けさせる手段であり、情操教育との両立は不可欠である。人と人とのコミュニケーション、社会勉強、共同生活、多様性を理解して受け入れる教育、道徳、倫理、体育、スポーツ、芸術等の学校で集って取り組むべき分野の教育とICTの有効利用をパッケージで捉えて推進することが必要である。
- (4) 貧困家庭のサポートが不十分だったことがICT導入を一気に進められなかった要因の一つである。ICT弱者に対し、地域総出できめ細かな支援をしていく時期である。
- (5) コロナ禍で奪われている大人の学びの場である生涯学習をサポートするなど、ICT導入で派生することもすくい取り、より良いICT環境の整備を進めていければよい。
- (6) オンデマンド型の講義で、定評のある講義を全ての学校で活用できるようにするなど、全県レベルで組織的に教材を準備していくことが必要である。
- (7) ICTは、過疎地と都市の学校間で学び合いができるなど空間を移動せずに同時双方向でできるメリットがあるため、活用方法を広げていかないといけない。
- (8) ICTにより、日常では見られない自然現象を教材として用意するという使い方ができ、ICTを使った教材を準備することで学習の質を変えていくことができる。
- (9) ICTにより、学習者のモニタリングや授業の分析がやりやすくなり、授業の改善につなげていくことができる。その場合、モニタリングや分析ができる人材の育成や、専門部署や専門家の配置が必要になる。
- (10) ICT教育の推進のためには、教育委員会の中に専門部署を設置し、集中して進める体制を目指してほしい。
- (11) 教員志望者をどのように教育し、教員採用の際にICTの知識や経験をどのように確認するかということも整えていく必要がある。

## 2 高等学校教育の在り方

### 新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」

#### 実践委員会（書面開催 6 月）

- ・「日本一の ICT 環境の整備」、「STEAM 教育」、「ICT、AI を活用したアダプティブラーニング」、「シズオカの教員はティーチャーからコーチ、ファシリテーター、メンターへ」の 4 つが実現できれば、世界に冠する「教育のシズオカ」実現も夢ではない。
- ・私立高校は先駆的な取組やチャレンジに特化し、公立高校で汎用的に取り組めることを、県主導でブラッシュアップして広く実現させるという役割分担の観点が必要である。
- ・グローバル人材の育成は、英語教育の徹底が重要となる。オンラインで海外とつながる教育を実践するとよい。
- ・「主要 5 教科の学び」と「部活動」に加え、「地域社会と関わり行動する等の活動」を取り入れるべきであり、生徒が五感で感じる教育の実践には、外に開かれた高校教育が不可避である
- ・県外大学へ進学し、そのまま静岡県に戻ってこない者も多いので、高校段階から県内企業の魅力を伝えていくべきである。
- ・人、地域、企業の共存が重要になる。将来にわたり、地域との関わりが続くような授業内容を考え、技芸を磨く人につなげていくシステムを具体化する必要がある。
- ・教員の多忙化の原因の一端が社会そのものの在り方にあるとすれば、地域全体での解決に向けた動きを県が後押しする必要がある。
- ・「グローバル人材」、「イノベーションを起こす人材」を輩出する教育が必要である。また、「徳」ある人物に触れ自らを省みる機会を高校生に持たせたい。
- ・グローバルな高校を目指すために、芸術分野の教育の充実化、海外からの生徒の受入れについて早急に議論する必要がある。
- ・「SDGs」を軸とする学びは、世界に通用する「最新の学び」となるので、その学びの機会を県内全ての高校生につくるべきである。
- ・「演劇のスペシャリストを育てる世界最先端の高校（演劇コース）」について、具体的なロードマップを考えたい。
- ・学びの価値を多様化させ、大学や就職先等に関係なく、自分が社会の中でパイオニアになりうる存在であるということを感じて自信を持てるような取組を行う必要がある。また、学びの動機付けや自己安心感の獲得につながる体験の充実が必要である。

総合教育会議（7月29日）

- (1) 高校生が実社会で活躍する将来のニーズに応じていくためにどういう高校が望ましいかという図式でそれぞれの課題を検討していただきたい。
- (2) 全ての高校がアピールできる特色を持てるような体制を目指せたら素晴らしい。
- (3) 静岡県に全寮制のインターナショナルスクールがあると、大きな広がりにつながっていく。その際の最大の課題は優れた教員の確保であり、全世界から集めるという発想が必要である。
- (4) ボランティアなど地域貢献活動の実績を学校裁量枠として設定している高校があるように、高校が地域に貢献していく生徒を支援していく考え方が必要になってくる。
- (5) スポーツや身体表現の分野で中学校連携できるとよい。身体表現という形でのスポーツと文化・芸術と共通部分があるので、皆で学び取りながら生徒が自分の進む方向を自主的に決めていけるような環境に高校が変わっていくと面白い。
- (6) 高等学校の在り方に関する議論は、際限なく話が広がり実行に至らないので、時間軸を設定し、すぐにやることと5年ぐらい先に目指すことをはっきりさせて議論できればよい。
- (7) 演劇科については、従来ある芸術コースで演劇系のことを行っている学校でカリキュラムを組み替えて SPAC の先生を入れる形であれば少しずつ進めそうな気がする。
- (8) 特色や特徴は多様性から生まれるので、教育、芸術、文化は、多様性をどう尊重していくかを常に念頭に置いて考えていく必要がある。

## 実践委員会（11月25日）

- ・生徒は主体的に行動するので、ICTをもっと使うことで、創造力を学ぶ機会を作  
ってほしい。
- ・英語をツールとして海外の生徒とディスカッションして、更に新しい取組を英語  
で発言して連携していけるレベルまで静岡県でも目指していくとよい。
- ・自ら考えて行動する力を企業側は求めているので、自ら考えてどう組み立ていく  
のかという力を身に付けられるような教育が小学校から必要である。
- ・いかに高校時代に社会活動を経験できるかが大事であり、単位化したりカリキュ  
ラムに入れたりして企業や社会で経験してもらえると見え方が変わってくる。
- ・生徒に何かきっかけを与えるためのサード・プレイスを地域の中につくり、そこ  
に企業も参画し融合すれば、積極的な生徒と気後れしている生徒にある想いの格  
差を解消できる。
- ・魅力あるまちづくりを行うと、そこにある学校や企業も光ってくるので、まちづ  
くりと学校づくりが両輪で必要である。
- ・生徒が地域の企業や社会と関わりながら様々なことを経験していくことは重要だ  
が、校長も地域を理解するようになると他の教員にも影響を与え、教員も地域を  
理解すれば、生徒の活動しやすい環境が整う。
- ・高校生には周りの人々に多様性があるように見えないので、多様な大人や生き方  
を中高生のうちに様々な形で見てもらえればよい。
- ・子供たちは、人間らしい大人と出会い、魅力ある大人との出会いによって変わっ  
ていく。生徒自身が地域の方と関わって、何がどう変わるかが重要である。また、  
技術や資格に走りがちだが、どこに行っても通用する力という土台を身に付ける  
ことが大事である。
- ・今までの学校教育の中にも自ら考え行動できる子供は育つ環境はあるので、進学  
という一大イベントを自分の力で乗り越えるということまで導いて後押しすれ  
ば、受験を通して自ら考える力は十分付くはずである。
- ・学校行事が縮小され、学校が進学学力にあまりにも傾倒しているので、昔からや  
ってきたことをしっかりやっていけば、自ら考え行動することは十分できる。
- ・小委員会での議論を来年度も進めていただき、熱心な方々のすばらしい御意見を  
伺い、実践委員会の意見として総合教育会議に反映していく形をつくりたい。

- (1) 今までの日本の教育が知識偏重型で、同質性を求める教育を行ってきた弊害が浮き彫りになったと改めて感じた。
- (2) 10年後、20年後、50年後にどのように世界が変わり、その世界で生き延びていくためにはどのような教育が必要になるのかというように、将来を見通した上で逆算して課題抽出する手法があってもよい。
- (3) 生徒と企業のアンケート調査では、教員の考え方や想い、捉え方が見えてこないで、余裕があれば切り込んでほしい。教員がどのような価値観を持っているのかをしっかりと把握する必要がある。
- (4) 教員には学校で求められている業務が多いので、地域と連携した学びをサポートする役割の人が必要である。県教育委員会としても、提案のあったコーディネーター専門人材の配置・育成についてサポートとしていく必要があると強く感じた。
- (5) これからの子供たちには、不確実、不確定な世の中を生き抜く力が大事であり、職業観を通じてどのような生き方をしたいのかをしっかりと考える教育が学校で広まっていくことが大事である。
- (6) 地域社会に開かれた教育について、教員免許を持っていない民間のスペシャリストが学校で授業を行った際に単位認定はどうなるのかなど、実際に起こる問題について他県で実施される研究に参加するので、問題が見えてきたら報告したい。
- (7) 静岡県の高校生は首都圏へ進学した後、いろいろな事情で地元に戻ってこない。実家を離れて一人で武者修行することで失敗や勉強を通して人間形成ができていくので、地元は無理やり残るようにするのではなく、若者が静岡県に戻って来てくれる仕組みをつくるのが大事である。
- (8) 静岡県の優秀な学生に対して、卒業後に地元の企業へ就職する代わりに奨学金の返済をその企業が支援することを約束する予約のような形にすると、学生はその企業に入るために勉強にも力が入り、企業にとってもプラスになるので、静岡方式としてトライしてもよい。
- (9) コーディネーターをどこで探し、どのように育成していくかということが集中して考えていかなければならない課題の一つである。企業と一緒に高校生を育てる重要性が指摘されているが、企業を退職して後進の育成に関心のある人を探してみるのもよい。
- (10) 今の高校はいろいろな取組を熱心に行っているが、良い実践例が世の中に広く周知される機会が少ないので、既に取り組んでいる良い実践例を一目で分かるように紹介していくとよい。
- (11) 学校と地域を一人でつなぐことは難しいので、地域の側から発掘したコーディネーターと学校のことをよく知っているコーディネーターが二人三脚でつないでいく形ができるとよい。
- (12) 高校と連携した企業の社員がとても生き生きとしているという報告があり、連携の枠組みの中で企業側にもポジティブな影響がある。高校と企業の連携によるポジティブな成果を企業側から経済団体の集まりの中で発表する機会があると、企業にも高校と連携してみようという視点ができる。



### 3 誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

いじめや不登校等の問題の解決に向け、どのようなことが求められるか。

また、経済的・社会的な事情にかかわらず、全ての子供が等しく教育を受けられるようにするため、具体的にどのような取組が考えられるか。

特別な支援を必要とする子供たちの将来の自立と社会参加を目指し、一人一人のニーズに対応した教育環境や教育内容の充実を図るとともに、個々の可能性を最大限に伸ばすため、具体的にどのような取組が考えられるか。

実践委員会（9月24日）

- ・情報を集積して分析できる社会になってきたので、アンケートを重視して活用することでいじめを未然に防ぐことにチャレンジしていけばよい。
- ・ICTを活用して共有のコンテンツを作成する際に横のネットワークを構築するなど、貧困問題やいじめ・不登校問題とICT教育を一体で進めていくことができる。
- ・学校に行かなくても学べるホームスクールは、いじめや不登校の問題を抱える子供たちにとって救いになる可能性もあるが、親の在宅を前提とするなど各家庭だけの負担とならないよう、地域で見守っていくことが必要である。
- ・地域コミュニティが強化されることで、地域の子供たちへの目配りが細くなり、落ちこぼれを防いで地域の教育レベルが上がっていく。
- ・リーダーシップ育成の観点から、生徒会やクラスなど生徒同士で解決することが大事であり、いじめがあったときに同世代が助け合い、それを教員等がフォローしていくということを考えるとよい。
- ・課題を大量に出す管理型の進学校では、生徒が疲弊して不登校につながっているため、こうした進学校の状況を見直し、自分の課題は自分でプログラムして選択できる自主自学のシステムにしてほしい。
- ・引きこもりやいじめにも理由があるので、相互理解できる時間があるとよい。失敗しても大丈夫だと言ってあげられる場所があれば、子供は救われる。
- ・「才徳兼備」の「才」だけを育てても駄目である。「才」の部分の活動の中で「徳」も育ち、「徳」があることで「才」が更に伸びていくので、「才」と「徳」の両輪で取り組んでいくことが大事である。
- ・いじめの防止の観点では、子供の頃からハラスメント教育を行う必要がある。ジェンダー、ICTリテラシー、ダイバーシティの問題など、様々なケーススタディによるハラスメント教育を学校現場で行えるとよい。
- ・特別な支援を必要とする子供たちに対しては、アダプティブラーニング（個別最適化学習）として様々なコンテンツが既に存在している。静岡県が先駆的にアダプティブラーニングに取り組んでほしい。
- ・学校の勉強が物足りないと感じている子供たちと、追い付いて行けないと感じている子供たちがいる。両方の子供たちにどのような光を当てたら本当の意味での才能を伸ばしていけるのかを今後考えていきたい。

- (1) 私塾で黙想を実践しており、子供たちに落ち着きが出てくるという効果を体験している。黙想の時間が学校教育の中に取り入れられている本県の教育は素晴らしい。
- (2) いじめ、不登校、貧困等の問題は、掛け算のように複雑に絡み合っており、支援する方々とつなく教員の負担が増えている。
- (3) 差別的な発言や同調圧力を子供たちに感じさせるような発言をしてしまう大人の意識改革が必要である。また、生徒自身で校則を考えて実践することでいじめ等を減らした他県の事例があるので、県内の学校でも生徒たちに学校の在り方を考えさせる取組を試すとよい。
- (4) スポーツがサード・プレイスとしての逃げ場という形でのサポートができることを実感している。
- (5) 教育委員会の取組のバリエーションは増えたが、十分行き渡るボリュームが用意できていない。いろいろな試みが進んできているので、どのような効果があるのかをきちんと見極めてボリュームを増やしていく努力が必要である。
- (6) 現代の重要なキーワードは「多様性」である。様々な場面で多様性を意識し尊重する社会をつくっていくことが大事である。ICTを使った教育も多様性であり、学び方に関しても多様性を認めていくシステムが必要である。
- (7) 「職業に対する誇りを持つ」ことで満足感や夢と希望を持ち、社会を乗り切っていくことができる。
- (8) 障害のある生徒と障害のない生徒とをできるだけ交流させることが大切である。学校のカリキュラムに福祉の時間をつくるなど、お互いに助け合うようなことができれば特別な支援を必要とする子供たちへの教育の充実と地域全体で成長を支える活動を促進できる。
- (9) 中学校までは少人数教育ができるようになったが、少人数教育は、教員の負担を軽減し、教育の質を高めるので、県内の公立高校でも決められた基準に対して疑問を持つべきであり、高校に広げていくことも検討課題である。
- (10) 画一化には一面では良い面もあるが、社会や文化、教育分野では逆効果となる。国や地域、そこに生活する人々の状況を踏まえて自由に組織化するべきである。
- (11) 通常学級にいる発達障害のある児童生徒に対するケアや、障害のない生徒の保護者等の取り巻く人たちの理解が今後の課題となる。
- (12) 肢体不自由な方が「OriHime」というロボットを使ってカフェを開くなどの活動をしている事例があるので、特別支援学校の中にもICTが広まっていくとよい。
- (13) 新型コロナウイルス感染症による経済への影響は今後の方が大きく出て、貧困等により就学を諦めざるを得ない子供たちが出てくることを危惧している。こうしたことが起きてこないかモニターする仕組みを作り、備えておく必要がある。就職の問題も同様に、状況をきちんと把握するためにアンテナを高くしておく必要がある。

#### 4 未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進

一人一人の能力、適性、成長に応じた多様な学習機会を提供し、個々の能力を更に伸ばしていくために、具体的にどのような取組が考えられるか。

グローバル化が進展する社会において、世界に貢献できる人材を育成するために、具体的にどのような取組が考えられるか。

実践委員会（11月25日）

- ・地域の困りごとについて、結果は出なくても取り組むところまでは総合学習でやってほしい。自分の進路や受験に関わらなくとも、変革と利他をポイントにSDGsを総合学習で進めていくとよい。
- ・才能を発揮する人材とグローバル人材の育成については、静岡県内の人たちだけで考えていても難しい。失敗してもよいので教育行政に関わる人のマインドセットを変えなければ、幾ら静岡に関わる人たちが話し合いをしても縮小していくような政策しか出てこない。
- ・全県下平等に実施すると大変なお金と時間がかかるので、例えばトヨタによる裾野の未来都市の建設などに乗るのも一つのアイデアである。
- ・グローバル人材の育成において、オンラインではできない生身の付き合いは大事だが、新型コロナウイルス感染症の影響により、海外に生徒を送ることができないので、海外から優秀な高校生を農業高校などで受入れてほしい。
- ・海外から勉強するために来てもらうためには、欧米ばかりに目を向けずに、身近なアジアから素晴らしい先生をたくさん呼べるよう環境整備をすると、本当の意味でのグローバル人材が育つ。
- ・小学校から、流暢な英語でなくても互いに通じ合えるような英語を毎週使うことが大事である。英語に触れていくことが優秀な才能を伸ばすことにつながるため、予算や仕組みの面で具体化をお願いしたい。
- ・世界で活躍するために子供たちを育てるのではなく、世界に貢献できる人材を育てていくという考え方にしなければ、優秀な人材はとにかく外に行きなさいということになり、遠くに行くことが目的で何が最終的な人生のゴールなのか見失ってしまう。
- ・一人一人の才能は違っており、その才能を伸ばす時にどれだけの教員がその生徒に対して目を向けているかということが、その生徒の才能をうまく汲み上げるための大事な仕組みだが、教員の多忙化により手が回っていない現状では、一人でも多くの生徒に目を向けられるような状況をどう作るかが非常に重要である。
- ・本当の意味でのグローバル人材を育てていくのならば、授業を完全に英語で行うことが重要である。

総合教育会議（1月15日）

- (1) 教える側の教員が価値観を変えなければならない。これまでの教育は横並びであり、均一性や同一性を求める教育だったので、そうした観点をリセットして出る杭をいかに多く作るかという教育に変えていかなければならない。
- (2) 芸術であってもスポーツであっても、とにかく多岐にわたって本物に触れる機会を多く生徒たちに与える工夫が必要である。
- (3) 情報機器や人工知能を駆使して基礎教育の効率化を徹底的に追求していくことで、教員の時間的・物理的・精神的な余裕が生み出されるので、その生み出された時間を生徒たちの個々の力を伸ばす教育に当てる工夫が必要である。
- (4) 学級、学年、学科、学校の種類、地域、公立・私立等の垣根を取り払い、類似する才能や同じような分野への興味を持つ生徒たち同士を幅広く交流させ、刺激を与え合うことで才能を伸ばしていくということが考えられる。
- (5) 特技や才能、興味を持っている生徒たちが、教えられるのではなく自ら考えて学ぶ時間を学校教育の中に単位として組み込んでいくような工夫ができれば、生徒たちを伸ばす大きなきっかけになる。
- (6) 多様な人材の育成の観点からは、学力が高いことで参加できるプログラム以外にもっと多様なプログラムを推進していく必要がある。
- (7) 自分で考えて自分で問題解決を図る子供を育てることが大事であり、そのためには何でも好奇心を持って実行に移すことで、自分で創り出していける力を持ってもらうしかない。自ら問題を見つけて解決する力を身に付けた若者が多く出てくることを期待している。
- (8) 高校が学校開放の拠点になっていけば面白い。健康増進で自分の体に興味を持った年配者向けの施設としてサポートしたいという企業が多い。教員ではない大人が学び続けている姿勢を見るのは子供たちにも良い刺激になるので、地域に対する学校開放の可能性が広がっていく。
- (9) 先進的な試みを真似し合う環境づくりが必要であり、そのために事例をきちんと紹介するようにすることが必要である。
- (10) グローバル人材とは、海外との接点ということだけではなく、多様性を理解し受け入れることができる人材である。
- (11) 英語圏以外の言語や暮らしに触れる機会を持つことは大事であり、静岡県は、地域の定住外国人や留学生といった人材を生かしていける。
- (12) グローバル化は、ただ海外へ広がっていくという意味ではなく、根っこを持っていないといけない。自分の座標軸を持つため、静岡県民が共通して認識できるものを強く打ち出していく必要がある。
- (13) 全寮制のインターナショナルスクールであってもバカロレアであっても、多様性の勉強の場としての高校を積極的につくっていくべきであり、そのためには知事部局と教育委員会が連携し補完し合いながら新しい高校の構想が実現していくことを望む。

## 令和2年度 総合教育会議の主な成果

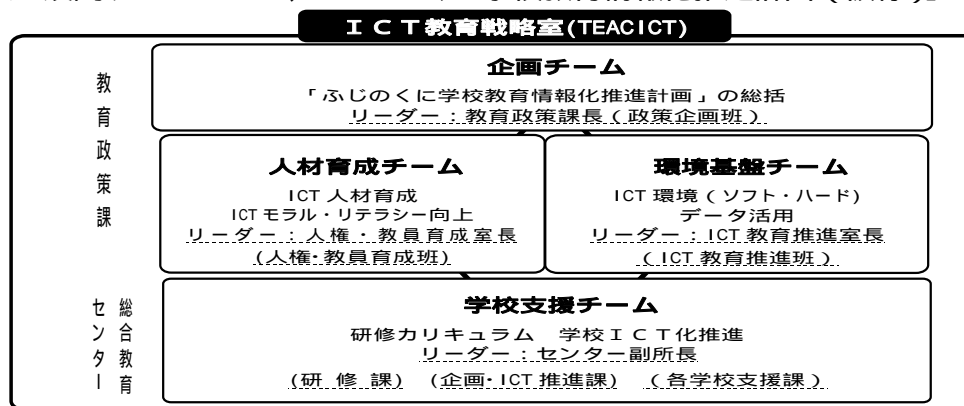
## 1 ICTを活用した教育の推進

参考資料P6 ICT教育の推進（教育委員会教育政策課等）

## (1) ICT教育戦略室（TEACICT）の設置及び体制強化

教育委員会の教育政策課、同課ICT教育推進室、総合教育センターによる「ICT教育戦略室」を令和2年8月に設置し、アドバイザーの助言を受けつつ、ICT教育に関する施策を一体的かつ強力に推進

令和3年度は、教育政策課人権・教員育成班（人権教育推進班から改編）を加え、企画、人材育成、環境基盤、学校支援の4チームを置き、連携して実効性の高い施策を展開するとともに、「ふじのくに学校教育情報化推進計画（仮称）」を策定



## (2) ICT教育に係るソフト・ハード一体的な推進

低所得世帯の高校生貸与用タブレット端末・モバイルルータの整備及び学習管理システム導入実証等を行うとともに、ICT活用に係る教職員研修を拡充

## 2 高等学校教育の在り方

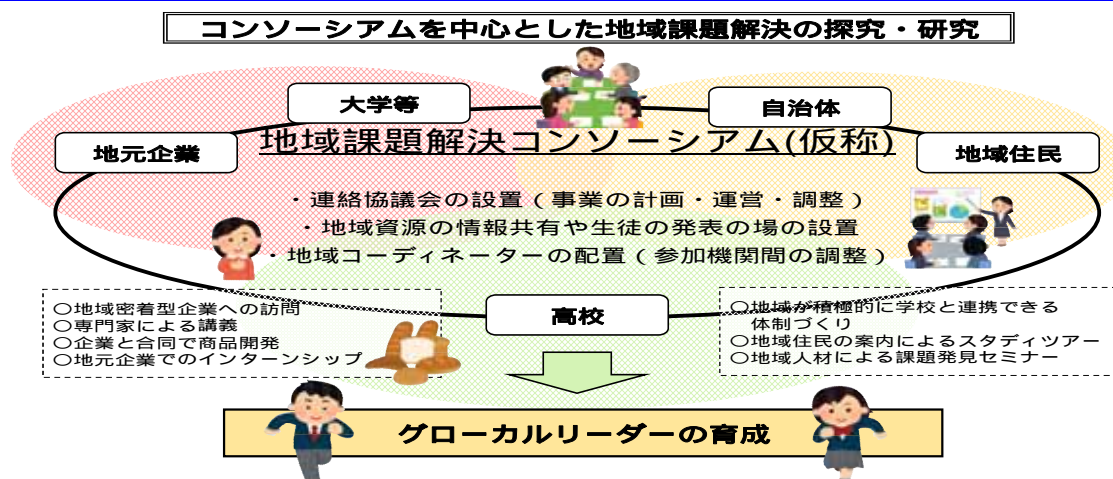
参考資料P10 新時代を拓く高校教育推進事業（教育委員会高校教育課）

## (1) 普通科改革及び新学科等の具現化（オンリーワン・ハイスクール）

モデル校を選定し、教育課程の研究、専門機関と連携した研究、地域協働による研究、多様な社会資源を活用した個別学習の研究等を実施

地域協働による研究においては、「才徳兼備の人づくり小委員会」の提案を踏まえ、住民や企業、大学等と連携した授業の実施に向け協議会を設置するなど取組を推進

【オンリーワン・ハイスクール】グローバルハイスクールの実践内容(想定)



- (2) 実学系学科の産学官との連携強化による実学の推進  
 産業界や大学の高度技術者や研究者の招請等による技術・技能の習得、他県高校生との競い合いによる技術向上、実学高校の技術・技能の小中学生への発信を実施

3 誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進

参考資料 P14 夜間中学設置事業（教育委員会義務教育課）

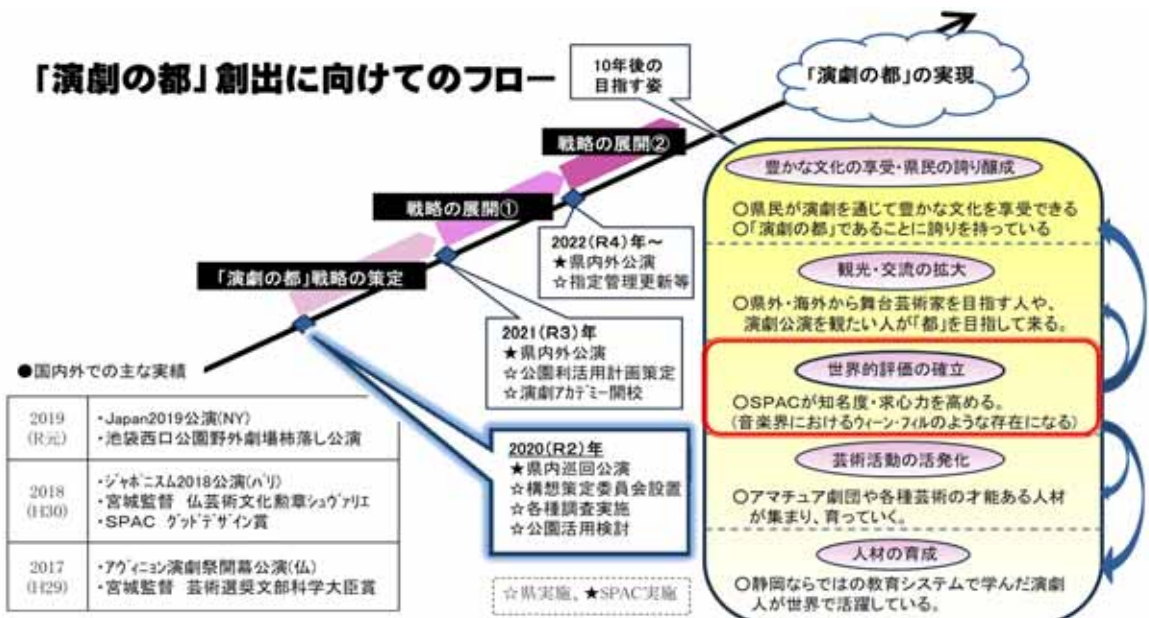
- (1) 夜間中学（ナイト・スクール・プログラム）設置に向けた検討  
 新たな学びの場、学び直しの場である県立の夜間中学（ナイト・スクール・プログラム）について、令和5年4月の開校を目指し、有識者会議による協議を行い、規模や設置場所等を含めた基本方針を策定

4 未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進

参考資料 P19 「演劇の都」推進事業（スポーツ・文化観光部文化政策課）

- (1) 「演劇の都」づくりの推進  
 高校生を対象に「演劇の都」を担える人材を養成する演劇スクール「SPAC演劇アカデミー」を開催するとともに、県立高校の演劇専門教育の実践的研究を実施  
 「演劇の都」の拠点となる舞台芸術公園の利活用策を検討  
 < SPAC演劇アカデミーの概要 >

対 象	令和3年度に高等学校に在籍する生徒（定員15名程度）
活 動 日 等	(1) 講座期間：令和3年度1年間のカリキュラムで終了する。 (2) 活 動 日：週3日程度（平日に2日、土日に1日程度）
活 動 場 所	静岡芸術劇場、静岡県舞台芸術公園
募 集	令和3年3月1日～3月15日 選考は予算議決後に実施
主 な プ ロ グ ラ ム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教養についての座学（平日）（オンライン参加も可能）</li> <li>・ミュージカル映画で学ぶ英語（平日）（オンライン参加も可能）</li> <li>・SPACの稽古見学、名作戯曲の上演に向けた稽古</li> <li>・SPAC作品等の観劇、県外合宿（夏季）成果発表会（令和4年2月）</li> </ul>



## 令和 3 年度静岡県総合教育会議協議事項（案）

令和 3 年度は、新たな「教育に関する大綱」及び「教育振興基本計画」を含め、以下の事項について協議する。

### 教育に関する大綱及び教育振興基本計画

#### < 想定される論点 >

- ・「知性を高める学習」の充実（学力向上、読書活動、ICT活用等）
- ・「技芸を磨く実学」の奨励（キャリア教育、地域学、スポーツ・文化芸術等）
- ・学びを支える魅力ある学校づくりの推進（学校マネジメント、幼児教育、特別支援教育等）
- ・グローバル人材の育成（国際理解、多文化共生、海外交流等）
- ・地域ぐるみの教育の推進（家庭教育、地域・企業との連携、社会参画等）
- ・誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進（いじめ・不登校、男女共同参画・ジェンダー等）等

### ICTを活用した教育の推進と新時代の教員育成

#### < 想定される論点 >

- ・ICT等の技術革新とこれからの学校教育
- ・教育の質の更なる向上と業務の効率化に向けたICT活用拡大の方策
- ・ICTの活用と情操教育との両立に向けた方策
- ・技術革新の進展等に対応した教員の資質能力及びその向上のための方策
- ・教員採用後を見通した大学における人材育成 等

### 誰もがスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境の整備

#### < 想定される論点 >

- ・ウィズコロナ時代に子供が日常的にスポーツ・文化芸術活動に親しむために必要な取組
- ・新型コロナウイルス感染症対策や少子化の進行、教員の多忙化等の制約の下での効果的・効率的な部活動の在り方
- ・大規模な国際大会（ラグビーワールドカップ 2019、東京 2020 オリンピック・パラリンピック）のレガシーの活かし方 等

### 誰一人取り残さない学びの保障

#### < 想定される論点 >

- ・学び直しの場としての夜間中学（ナイト・スクール・プログラム）の意義と求められる教育活動
- ・夜間中学設置も踏まえた不登校の児童生徒や外国人に対して求められる就学支援
- ・医療的ケアを必要とする児童生徒の就学機会の確保
- ・家族の介護等を行う子供（ヤングケアラー）への支援
- ・個々の能力等に応じた学習支援 等

### 地域と連携した高等学校教育の在り方（小委員会の提案を踏まえた協議）

#### < 想定される論点 >

- ・令和 3 年度のモデル校での取組の検証を踏まえた改善事項及び中長期的な取組
- ・ICT活用や少人数教育などによる教育の質の確保

## 県教育振興基本計画(2018年度～2021年度) 2020年度評価

(総合教育局 総合教育課)

### 1 要 旨

「静岡県教育振興基本計画(2018年度～2021年度)」(以下「計画」という。)については、その進捗状況を確認するため、毎年度評価を行い、施策の継続的な改善を図るものであり、この結果は、総合教育会議へ報告の上、県ホームページで公表する。

なお、この評価は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づく、県教育委員会の事務の管理及び執行状況についての点検評価を兼ねる。

### 2 評価の方法

庁内組織の「静岡県教育振興基本計画推進本部」を通じた自己評価を基に、外部有識者会議の「静岡県教育振興基本計画推進委員会」の意見を踏まえ、評価書を取りまとめた。

### 3 令和2年度(2020年度)の評価の概要

#### (1)「目標指標」の評価

- ・県の新ビジョンの評価基準に則り、進捗状況を5段階(目標値以上、A、B、C、基準値以下)で評価し、「指標の評価」及び「今後の方針」とともに記載する。

<令和2年度の変更点>

- ・新型コロナウイルス感染症の影響を受けた目標指標は、「進捗」欄に「 」を記載する。
- ・「 」を記載した目標指標は、影響を補完・軽減する取組や工夫、当初の計画を代替する取組を含めて「指標の評価」を記載するとともに、影響を踏まえた方針も含めて「今後の方針」を記載する。

#### (2)「主な取組」の評価

- ・進捗状況を3段階( 、 、 )で評価し、「進捗評価の根拠等」とともに記載する。
- ・評価書では、各施策に影響の強い「主な取組」を抜粋して「進捗評価の根拠等」を掲載する。なお、「 」評価の全ての取組について、具体的な理由を含めた取組の評価及び今後の方針をより詳細に記載する。

<令和2年度の変更点>

- ・新型コロナウイルス感染症の影響を受けた取組は、「主な取組」名に「 」を補記する。
- ・「 」を補記した取組は、影響を補完・軽減する取組や工夫、当初の計画を代替する取組を含めて「進捗評価の根拠等」を記載する。

#### 目標指標の進捗状況

区分	目標値以上	A	B	C	基準値以下	-	計
基準	「実績値」が「目標値」以上	「実績値」が「期待値」の推移の+30%超え～「目標値」未満	「実績値」が「期待値」の推移の±30%の範囲内	「実績値」が「期待値」の推移の-30%未満～「基準値」超え	「実績値」が「基準値」以下	統計値等発表前、当該年度に調査なし等	
計	5 15.2%	3 9.1%	10 30.3%	4 12.1%	11 33.3%	5	38

(2019年度)

計	4 12.1%	3 9.1%	11 33.3%	6 18.2%	9 27.3%	5	38
---	------------	-----------	-------------	------------	------------	---	----

54.6%

45.4%



< 新型コロナウイルス感染症の影響を受けた目標指標 >

章	指標名	進捗状況
第1章	全国規模の学力調査で全国平均を上回る科目の割合	
	学校の授業以外で1日当たり1時間以上勉強している児童生徒の割合	
	児童生徒に望ましい勤労観・職業観を育む教育を実施した学校の割合	B
	国民体育大会における総合順位	
	県内文化施設(概ね300人以上の公立ホール)利用者数	基準値以下
第2章	ふじのくにグローバル人材育成基金による海外派遣者数	B
	高校生アカデミックチャレンジ参加高校生数	
	県内高等教育機関の公開講座・シンポジウム開催回数	基準値以下
第3章	県総合教育会議・地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会開催回数	目標値以上
	公民館・生涯学習施設等の講座・学級開催回数	B
	消費者教育出前講座実施回数	目標値以上

主な取組の進捗状況

区分					計
観点	時間的	前倒しで実施	計画どおり実施	計画より遅れている	
	数量的	増加・拡大傾向	横ばい傾向	減少・縮小傾向	
計		22(3) 3.7%	522(77) 87.3%	54(5) 9.0%	598(85)

(2019年度)

計		20(1) 3.4%	576(85) 96.3%	2 0.3%	598(86)
---	--	---------------	------------------	-----------	---------

( )は再掲の取組で内数

< 新型コロナウイルス感染症の影響を受けた主な取組数と割合 > (該当数 / 全体数)

章				計
第1章	2 / 15	110 / 276	15 / 15	127 / 306
	13.3%	39.9%	100%	41.5%
第2章	0 / 2	20 / 57	15 / 15	35 / 74
	0%	35.1%	100%	47.3%
第3章	1 / 5	70 / 189	23 / 24	94 / 218
	20%	37.0%	95.8%	43.1%
計	3 / 22	200 / 522	53 / 54	256 / 598
	13.6%	38.3%	98.2%	42.8%

4 令和2年度スケジュール

時期	内容
11月9日	県教育振興基本計画推進委員会(外部有識者意見聴取)
12月上旬	県教育振興基本計画推進本部幹事会(書面開催)
1月下旬	県教育振興基本計画推進本部(書面開催)
3月8日	県議会2月定例会常任委員会(文化観光、文教警察)に提出
3月24日	総合教育会議で報告、県ホームページ公表